



スポリカ(株) 無足場アンカー工法™

自然回復する環境システムを創生する

鳥取県米子市両三柳922-1

TEL.0859-57-3520 FAX.0859-57-6559

<http://www12.ocn.ne.jp/~srk/>

ワイヤー移動方式で高所や狭小地も工事可能 『無足場アンカー工法』が業界の常識を覆す！

対談

代表取締役

荒浜 優治・荒浜 進也

一級土木・一級造園施工管理技士
一面施工管理技術者

インタビュー・プロフェッショナル元参議院議員

大仁田 厚

大仁田 世界初となる『無足場アンカー工法』を考案された、スポリカ(株)の荒浜優治代表と、ご子息の進也さんにお話を伺います。まずは現在までの沿革をお聞かせ下さい。

荒浜 実家が土木業界に携わっていたのですが、私は金融会社のIT部門で十数年間システムエンジニアを務めていました。その会社での経験として、技術は大手会社で作るのではなく、必要に迫られている現場で作られるということ。まさに『必要は発明の母』なのです。土木の法面専門会社に転職後、その経験から革新技術は現場を知っている

私達が革新技術開発の一番近くにいると確信し、研究を始めました。やがて、良いものが少しずつ完成するにつけ「なぜ大手がこれを『開発できなかったのだろう』」という漠然とした疑問が湧いてきました。私が推察するに、大手は情報も技術もなかった数十年前に不完全ながら技術を確立し、確固たるシェアを獲得してしまったわけで、他に競争相手のいない状況下で自らを否定するような新技術の開発はしない経済至上主義的な思想に支配されているのではないかと感じました。大手がそのような姿勢であるため、「使

づらい」「コストが高い」「安全に不安がある」「現場で専門的な人材がない」などの問題を感じても、現場の施工者は結局、諦めざるを得ないケースが多くなるのだと。

大仁田 なるほど。そこで、使い勝手の悪さを解消しようと思われたのですね。

荒浜 はい。もちろん従来と同じことをやっていたのでは意味がありませんので、業界の常識を覆すような特徴のある新しいことにチャレンジしたいと考え、しかも、誰もが分

思い、そこで着目したのが地滑りなどを抑止するアンカー工の仮設足場というわけです。

大仁田 足場というと様々な工事現場で欠かせないものですが、どのように画期的なのか詳しくお聞かせ下さい。

荒浜 通常の地滑り対策などの工事現場では、三トンの重さの削孔機械に耐えられるように大きな足場を組むのですが、かなり大掛かりになるため工事費の三〜四割は足場の費用になってしまいます。あくまで仮設であるにもかかわらず、工事費全体を押し上げる原因となっている足場を何とかしたいと考えたのが『無足場アンカー工法』です。

業界活性化のための新技術開発

大仁田 『無足場アンカー工法』はどのような発想で取り組まれたのですか。

荒浜 仮設足場排除と機械自体を小さくし、効率的に作業ができるようワイヤー緊張による施工方式を考えました。当初はなかなか形になりませんでした。約五年を費やしてワイヤー緊張による移動や反力対応など一つ一つのパーツを開発するうちに、「これらがうまく連携すればいける」という自信を深めました。

大仁田 『無足場アンカー工法』を活用すると、どのようなメリットがあるのでしょうか。

荒浜(進也) 高い場所に足場を設置する大規模工事では何千万円レベルの費用が掛かり、ビルの骨組みのような大規模足場になってしまいます。この『無足場アンカー工法』はワイヤー緊張の小型機で自由自在に移動できますので、高い場所や狭い場所での作業がしやすくなります。

大仁田 足場が不要になれば、機械も変更しなくてもいいと思いませんか。

荒浜 おっしゃる通りで、そこで当社では無足場に適した革新構造の削孔機械も開発し

ました。無足場そのものが世界で類を見ないものですが、これだけの小さな機械で大きな機械と同等以上の力を発揮できるのは皆無で、そのため多くの特許を取得しています。

大仁田 問題だったコストは、これによってどのくらい抑えられるのですか。

荒浜(進也) 従来に比べて約六割で済みます。本設工事に不必要な仮設足場が不要となり、従来は不能であった複数機による同時施工が可能となるので経費節減でき、収益を上げることが可能です。

大仁田 やはり、一番の関心は安全性についてですが、そのあたりはいかがですか。

荒浜(進也) 国土交通省発表では、労災事故の発生原因は足場からの墜落事故が最も多く、さらに現在の足場は地震に対する強度が考慮されていないため、大地震が発生すると一瞬にして崩れる懸念があります。『無足場アンカー工法』は複数本のワイヤーで削孔機械を繋ぎ、作業員もロープ足場で直接繋がれ



SAMPLE



SAMPLE

IT部門のシステムエンジニアから転身してスポリカ(株)を設立し、世界初の『無足場アンカー工法™』を開発した荒浜優治代表取締役。業界の常識を覆す画期的な技術を実現できたのは、「『仕事』というよりも『あそび』が原点」と語るように、業界に染まらない素直な視点による発想と、類稀なるモノづくりへの探究心である。また、自らの足で全国の企業に営業をかけていく情熱の持ち主で、今後もご子息の進也氏と力を合わせながら既成概念に捕らわれない発想を駆使し、日本の元気のエネルギー源となるべく躍進を続ける。

INTERVIEW YUJI ARAHAMA・SHINYA ARAHAMA × ATSUSHI ONITA

大仁田 「無足場アンカー工法」はどのような場所で使うことができるのでしょうか。
 荒浜(進也) 地滑り工事や土木工事など全般で使うことができ、施工困難であった国内のあらゆる場所や条件下で活躍できます。最近ではアジア各国への導入についてもお話を伺っているところでして、現段階では検討中ですが、将来的には視野に入れることも必要ではないかと思っています。
 大仁田 グローバルに展開できればいいですね。ところで、荒浜代表は自ら営業マンとしても活動されているとのこと。
 荒浜 はい。全国を飛び回って各企業を訪問していますが、実際にお話を聞いてみると「今まで諦めていた」という企業がとても多く、私どもの『無足場アンカー工法』をご説明すると驚かれ、ありがたいことに「ぜひ使いたい」と言ってくれて頂くお客様が多いですね。ちなみに「無足場アンカー工法協会本部」を設立し、現在は協会員(全国約五十社)が一丸となって技術を広めているところです。
 大仁田 業界の常識が一気に覆りそうですね、工法が変われば様々な方面に波及効果も出てくるのではないのでしょうか。
 荒浜(進也) 現在、ヤマモトロックマシニング(株)さんと提携を結び、「未来工法」と銘打って軽量ロータリーパーカッションによる二



重管施工の技術に取り組んでいます。また、削孔径七十ミリで二重管削孔が可能な『ロストビット』、岩削孔最強最速『インプッシュアダプタ』というツールの開発や、斜面凹凸に対応可能で腕部分が閉じて土塊を掴む『キャッチアーム』、植生勾配限度斜面(六十度)以上でも斜面安定と緑化施工ができる『アイビーウォール』という、すべて従来でできないとされていた世界初の革新ツール。土木商品の提供も進めているところです。

「あそび」の心こそが発想の原点

大仁田 以前は異なる分野の仕事に携わっておられた荒浜代表。このような技術的な着眼点はどうにして養われたのですか。
 荒浜 私は幼少の頃からモノづくりに興味を持っていました。IT関連と土木開発商品という全く異なる分野のように思われるかも知れませんが、実はコンピュータのプログラム作成も一種の機械づくりでして、一つのパーツをどのようにつくり、どのように繋ぎ合わせていくかという点で、機械を製造するのと同じと言えます。探究心旺盛な人間としては業界が異なることはあまり関係なく、突き詰めて考えていくという同じ作業をしているような感覚です。
 大仁田 型や既成概念に捕らわれない柔軟な考え方ができるからこそ、様々なアイデアが出てくるのでしょうか。
 荒浜 発想の原点は良い意味での「あそび」でして、仕事という使命感に縛られるのではなく、興味から入っていきます。思い付いたアイデアを形にして人様に使って頂き、それがどんどん広がって業界全体が発展していく。そう思うと「これほどやり甲斐があった楽しいことはない」と考えるだけでも熱が入ってしまい、時間を忘れて没頭してしまうことも多々あります(笑)。

大仁田 代表のそのバイタリティーが、本当に素晴らしいです。
 荒浜 ありがとうございます(笑)。私どものような鳥取県の小さな会社だからこそ、新しいことにどんどんチャレンジできると思っています。ですから今まで知られていなかった業界の常識なども、ホームページで取って問題提起をするような形で情報掲載しているのですよ。ちなみに建設現場で使われる大手各社の技術は革新的でなくそれほど差はないので、今や価格競争が中心になってしまっています。また、「この業界はそんなものだ」と暗黙の了解になっている感がありまして、最初に『無足場アンカー工法』のアイデアを話した時「そんなものはあり得ない」と頭から否定されました。しかし、簡単にめげる私ではありません(笑)。「素人の感覚だからこそこのような発想ができた」「少しでも可能性があるのなら追いかけてみたい」という気持ちで大切に、理論的に組み立てていきましたね。
 大仁田 改めてお聞きしますが、ご子息から見て、代表はどのような方ですか。
 荒浜(進也) 昔からこの業界にいる人の多くは、「ダメなものダメ」と最初から諦め、「なぜ、ダメなのか?」と聞くと明確には答えられないケースが多いのですが、そうなる父は素人目線で素朴な疑問を持ち、とにかく追求せずにはいらなくなるようですね(笑)。その探究心の強さは、息子ながらもいつも感心しています。
 大仁田 ところで、社名の「スポリカ」という響きがユニークですね。どんな意味があるのでしょうか。

◇ INFORMATION

未来工法

無足場アンカー工法™でのみ可能!

軽量ロータリーパーカッションによる二重管施工

硬岩削孔最強
インプッシュアダプタ™
 開発アダプタによる本機動力とダウンホールハンマーを切り離す事が可能となった事で、ダウンホールハンマーとロータリーパーカッションとのW打撃による施工が出来る。別削孔に特化した全土質対応型の究極ツール!

軟土質での最小径二重管施工
ロストビット™
 削孔ビットは1mmの超微細な超硬合金チップで、J4品質基準に合わせた二重管施工が可能。削孔径70mm-90mm以下の高経済性・高品質施工が可能。

新製品

無足場アンカー工法™
 卓越した性能で通常条件法面はもとより、高所・狭小地・飛び地など、施工難度の高い条件地でも、二重管(高品質施工)を可能とした先進的な特許工法です。

「キャッチアーム」(無足場アンカー工法受圧板)

荒浜 “Spontaneous recovery”を略した言葉で、意味は「自然発生的な回復」です。昨今問題となっている忘れられがちな維持作業を必要としない自動再生的な技術をつくり出したという当社の理念です。
 大仁田 最後に将来への展望や夢をひと言。
 荒浜 今後「スポリカ」だからこそできる」という信念を大切にしながら仲間の輪を広げ、大手以上の結果を出せる企業になれるよう日々精進したいですね。そのためにも今まで以上にフットワークを軽くして、会員契約及び商品をご購入頂いたお客様の声や反応をできるだけ吸い上げ、新たな商品のアイデアに繋がれたらと思っています。公共工事は日本の基幹産業の一つですから、既存技術の改善だけでなく業界の裾野が発展的に広がっていくような商品開発を手掛ければなりません。また、そうすることで雇用拡大に繋がれば最高ではないでしょうか。
 大仁田 優秀な技術を目の当たりにして感動しました。日本が元気になるきっかけづくりとなりますように、今後も頑張ってください。